

2178A
146号

同人雑誌『愛と回』に「三選」の発表までお送り下さい。
〒108-8385 東京都港区三田2-15-15 同人雑誌編集部
〒108-8385 東京都港区三田2-15-15 同人雑誌編集部

加藤有佳織

出町子「剣撃」(『詩と眞實』No.82)は、夫ばかりが飲む朝の牛乳を買うため、ルイという女性が近くのコンビニへ出かけるところから始まります。冬の夜、駆け込んだコンビニで週刊誌がふと気になって手にすると、「夢のような」グラフィックページに目を奪われ、とつさに一枚破り取ります。家に戻り、夫に見つからないようベッドの下にそれを隠します。商品を破り盗んできたことに後ろめたい高揚を覚えながら、夕食を用意して夫の帰りを待ちます。けっきょく夜更けに帰宅した夫は食べずに眠り、翌朝はシャワーを浴びて出かけていきます。見送ってからルイ自身も出勤し、破ってきたページのことはかり考えながら仕事をやり過ごします。ところが、帰宅してあらためて見ると、それはごくありふれた写真に過ぎず、自分の怪しい行動の証拠となるページを処分しなければと思ひ始めます。そして、小さく小さく切り刻みます。もとのかたちを失った細かい紙片が「少し綺麗」だったので、ルイは箱に保管しておくことにします。箱を満すために雑誌を買っては破いてちぎることに夢中になっていると、数日ぶりに帰宅した夫が、急な出張だと言ってスーツケースに衣類を詰め込ん

でまた出かけていきました。それからルイは、自身の「二張羅」を切り刻み、雑誌を集めては破り続けます。きちんと生きてきたルイが紙を切り刻むことに心奪われていくさまをつぶさに描き、一行ごとに改まる文章の連なりは、それ自体が紙片の堆積のようで見事です。

魚家明子「ネロとお菓子と少年と」(『北方文学』第82号)の語り手は、悩みがあつたり悲しかったり、あるいはうれしかったりすると、口からお菓子が飛び出てきます。彼女の心を反映して、飴やガム、おせんべいやチョコレート、深刻なときにはより「高級そうな繊細なつくりのお菓子」が出てきます。それは小学校三年生のときに始まり、会社勤めをするようになった今も起ります。そうして出てきたお菓子を食べると「心のなかのもやもやも、一緒に胃のなかで溶けていくような気がして」いましたが、最近苦いお菓子が多くなり、食べないことが増えています。そんなある日、不思議な男の子に出会います。空腹を訴える彼に、捨てをびれたお菓子を差し出します。屈託なくお菓子を食べる男の子の姿を見て、語り手のうちに積もった疲れが「流れ落ちていく」感覚を抱きます。とき同じくして、会社の同僚に声をかけられて少しずつ打ち解け、やがてお菓子が飛び出てくることはなくなります。そして男の子は、「僕が食べなくても、誰かが一緒に食べてくれるね」と言って姿を消します。男の子の造型にやや物足りなさを感しますが、この語り手ならばこのようにしか語らないの

佐々木義登

須藤薫子「ヌマンド」(『飢餓祭』Vol.47)は主人公が身に覚えのない電話を受けたことをきっかけに、日常が崩壊してゆく物語です。七年前、夫の車に乗っていて「西の沼」で道に迷い、そこに生きる謎の生きもの「ヌマンド」を目撃したことを思い出した主人公は、電話を受けて以降「西の沼」や「ヌマンド」に心を奪われます。ネットで情報を集め、沼で小屋のような物件が売りに出されていることを知り、夫と娘を捨て、一人そこで暮らすことを選択するのです。小屋の中で現実とも幻ともつかない時間を過ごすうち、沼の中から現れた「ヌマンド」達の襲撃を受けます。ライフルを撃ち応戦するも弾は尽き、最後は「ヌマンド」達の声に導かれ沼の中へ引きずり込まれるわたしなのでした。何気ない日常が予想もつかない狂気をはらんでいることを前半は抑制した文体で語ります。一転、後半の悪夢のような沼の小屋での暮らしが粘着質の文章で描かれているのが印象的でした。作者の類まれな想像力と、それを支える確かな筆力が発揮されていると思います。

吉川猛「愛と回」(『愛と回』第16号)ではあらゆる場所に辿り着くのが困難で、脱線を重ねる主人公が

描かれます。冒頭、父の墓参りをする佐藤郎ですが、寺の場所も墓も定かではなく、しかも自分以外の誰かが墓参りをしている痕跡を見つけ、どうやらその手掛かりが「ハクイ市」という場所にあるという思いに囚われます。ライブに出演するために京都に行かねばならないのですが、ラッパである主人公が、即興の歌を口ずさむ度に、目的から離れていきます。石川県の羽咋市にやってきた佐藤はあてどなく町をさまよって「クラブ ニューハワイ」に辿り着きます。DJブースもあるクラブで他の客やママとダンスを踊り始めます。やがて鳴る携帯電話、声は聴きとれず、DJブースにいる人影を追おうとしますが人の渦に巻き込まれ身動きの取れない主人公なのでした。社会性によって明確に切り分けられているはずの世界の不確かさ、曖昧さが描かれています。主人公がラッパで韻を踏みながら、無関係な言葉の連想によって現実を逸脱してゆく展開が独創的でした。

島田泰穂子「並行世界とサイケデリック食堂」(『m.o.』Vol.17)は受験に失敗しゲームの世界に逃避した主人公「ぼく」が、学園生活をゲームに例えながら、リアルを回復する物語です。小説世界はパラレルワールドとなっており、カレーが違法とされ、尊厳死が一般化しています。兄のケイ、祖父、そして染谷教授といった登場人物とのやり取りや、激辛カレーが強い身体的刺激を主人公にもたらし、「ぼく」が失っていた、実在と観念との接点を呼び覚まし

だろうとも思います。心のかけらがお菓子になって飛び出てきて、それをまた口にして、溶かす。自分ひとりで完結させてきた女性が心を開いてみようとする姿を描くほろほろとした筆致に魅力がありました。

森田哲司「動物福祉」(『ム。ロ。』Vol.17)が描くのは、食肉卸売会社の経理課に勤める八坂須佐男が宿直したある夜の出来事です。屠畜作業主任の牛頭とともに、係留所にいる七十八頭の牛と二百頭の豚を見守りながら、営業課係長への昇任試験に備え、分厚い創立記念誌と動物福祉に関するパンフレットに目を通します。十時頃、係留所の豚たちが騒ぎ始めたため、牛頭の見立てに従って、リーダーらしき体格のよい一頭を屠室へと追い込み、気絶させます。牛頭がナイフを構えた瞬間に豚の上肢が跳ね、彼自身を刺してしまいます。そして、開けたままの戸口から豚たちがなだれ込むのです。食肉卸売業のルポルタージュとしての側面を持つとともに、八坂の置かれた状況や人間関係をむだなく示しながら宿直日の数時間を描き出します。世々に継がれた理念と現場にいる牛頭の言葉の対比が巧妙である一方、係留所にひしめく豚や牛に散水して立ち上る湯気や、所内に充満する気配の描写はむせかえるようでもあり、理知と身体感覚の共存が印象深い作品でした。

森美樹子「今年の夏」(『九州文学』第57号)では、図書館に勤める女性が右眼に異変を感じ、眼科専門医院で網膜

を再構築する手術を受けます。術後の療養期、久しぶりに出かけた彼女は、静かな図書館を見つけます。そこには、右眼を手術した医師がいました。眼球を手術した指先に恋した彼女と、眼球だけを愛する彼の一瞬の再会が、少し霧のかかったような雰囲気を描き出されます。

須藤麻子「ヌマンド」(『飢餓禁』Vol.4)は、沼地に暮らす沼人に呼ばれ、表面を繕うだけの夫と彼の「分身」のような娘との暮らしかから離れていく女性の物語です。ぬかるみの感触とにおいを感じさせる語りが秀逸でした。

飯田米和「栲栳」(『ム。ロ。』Vol.17)は「あるべき家族」に整えることに邁進する日本に暮らす老齢の実乃里が語り手です。「欠けた家族」は見捨てられ、逸脱して役に立たないとみなされた者は排除される社会には、ぞわっとする現実味がありました。

あびる諒「赤布」(『詩と眞實』No.80)は、大地震と津波、出産と死を重ね合わせ、どくんどくと脈打つような圧倒的イメージを生んでいます。門倉まり「父を恋つる人」(『じゅん文学』第105号)の語り手は、亡き父の随想を見つけます。親もまた子であるという事実をじんわりと描きます。

日下溪子「宇宙 創造してみた」(『SCRAMBLE』第40号)は、宇宙を育てるという着想が楽しい作品でした。西村郁子「灰皿と水櫃」(『せる』第116号)や山田佳苗「たらんちよ」(『樹林』Vol.67)も印象的でした。

ます。未成熟な青年のドルドウングスロマンにとどまらない作品でした。設定も精緻に作り込まれ、言語感覚も卓越していました。

キンミカ「猫屋敷の老人」(『ム。ロ。』Vol.17)はDVを愛けながらも彼氏との関係を経ける「私」が、ある老人との出会いによって内面を変化させてゆく物語です。主人公にとって了解困難な他者としての老人との関係が紡がれてゆくうちに、幼少期の記憶がよみがえり、長年隠蔽されていた自己と出会います。ラスト近く、瀕死の老人を介抱しながら、彼氏との別れを決意する場面は秀逸でした。異色のオチラを放つ老人を描き切れたことで、作品の個性が際立ったと思います。

竹野満「と・う」(『麦笛』二十八号)の主人公は職務に忠実な介護者です。安楽椅子に座った匠さんと、アクリル文字盤を介して話をしているのですが、彼の訴える〈と〉〈う〉の意味がどうしても分かりません。互いにいらいらしている中で主人公「かれ」の妻に対する仕打ちや、自殺した父の記憶が紡ぎだされます。作品の後半〈と〉〈う〉の意味が「ふきのとう」であつたらしいことが明かされます。日頃は業務内容を越えない主人公が庭の路の藁を摘み、自分も妻のために持ち帰ります。人と人が分かりあうことの困難さと、その隔たりに甘えて身勝手に振る舞う人間の姿が、独特の方言を織り交せて表現されていると感じ

ました。

小谷みのり「前方というものはない」(『前衛アンソロジー2 解体する文学』)はこれまで取り上げた小説とは趣きを異にします。二〇一六年に「有限性の後で」が翻訳された話題になったカンタン・メイヤーを巡る哲学エッセイとしても言える内容でしょうか。といつても「思弁的实在論」の批評というわけではなく、小説とも詩ともつかない言語表現で、最後は「前方」もしくは「前衛」という概念を解体させる刺激的な作品でした。

歌猫まり「まるとしかく」(『前衛アンソロジー2 解体する文学』)はベテラン精神科医が、患者の言葉に誘発されて天井に見えるはずのない目が見えてしまうというもので、しかしこれがストーリーとして展開するのではなく、実は登場人物が読者に読まれていたというメタフィクションへと変容する構造的な企みが面白かったです。

木下衣代「おやすみといつて」(『黄色い潜水艦』73)は彼氏や母親との人間関係に苦悩する主人公がネットショッピングと返品を繰り返しています。彼に別れを告げるラストでは、心の裂け目が表出するようで読みごたえがありました。

それ以外では、櫻井夏実「的外れ」(『海光』第7号)、門倉まり「父を恋つる人」(『じゅん文学』第105号)、大嶋岳夫「詩乃」(『時空』第51号)を興味深く読みました。